

短 報

ひきこもりの若者の人間関係についての一考察 — 大学生の人間関係との比較を通して —

小 柴 順 子^{*1}

はじめに

筆者は、東広島で、「ひきこもりについて考える会」を発足し、ひきこもりの家族のサポートを行っている。その会で親から聞いた子どもの行動や、ひきこもりから回復した人の手記や、インタビュー記事などから、ひきこもりの若者は、周囲の大人（特に親）や友人に気を使いすぎて、精神的に疲れ果てて自己防衛ためにひきこもっているように見える。

一方、若者の人間関係は、変化してきているように見える。例えば、数年前からの現象であると思われるが、友達と一緒にいながら、その友達と話すのではなく、それぞれが別々の人と携帯電話で話している光景がよく見受けられる。また、友達や親など身近な人を傷つけないからなるべく自分の考えや意見を言わず、周囲の人に合わせてしまうという傾向も見受けられる。

若者の人間関係に関する先行研究は、医学中央雑誌検索によると1996年～2001年の5年間に96件あるが、そのほとんどが精神疾患あるいは身体疾患（主に難病）の患者についての事例研究である。健康な若者やひきこもりの若者の人間関係についての調査研究は少ない。また、ひきこもりの若者の人間関係の調査には、対人関係の障害という、ひきこもりの特性から調査方法や調査数に限界がある。しかし、ひきこもりの若者とひきこもりでない若者の人間関係を比較検討することはひきこもりの若者を理解しサポートする上で基礎となり得る。

本研究では、通学している大学生の主として信頼関係を中心とした人間関係について調査し、ひきこもりの若者の人間関係と比較検討することによって、その違いと共通点を明らかにする。さらにひきこもりのサポートに役立つ事柄を考察したい。

研究方法

1. 「ひきこもり」でない若者に対する調査方法

A 大学看護学科2.3年生、206人を対象に2001年7月26日と30日のいずれかの日に、調査用紙を配付しその場で記入してもらいすぐに回収する方法で行った。調査項目は、表1のとおりである。

2. 「ひきこもり」の若者に対する調査方法

ひきこもりの若者に直接話を聞くことは難しいため、筆者が同席者として聞けた若者2例と、「ひきこもりについて考える会」(親の会)に出席している親の発言の中から子どもの言葉として聞けたもの5例に加え、田辺裕¹⁾と塩倉裕²⁾のインタビュー調査の対象者(当事者)のコメントを参考に回復者の言葉からその人間関係をまとめる。

研究結果

1. 「ひきこもり」でない若者の調査結果

調査対象者206名のうち有効回答202名有効回答率は98%であった。有効回答の性別・年齢別構成は表2のとおりで、20代前半が92.5%をしめ、男性と女性の解答についても大差が見られなかったため、全体としての結果を記載する。

1.1. 「あなたは、心から信じられる人がいますか？」について

「a. いる」と答えた人は178名(88.1%)であり、その内訳は図1に示すとおりである。また、「b. いない」と答えた人は24名(11.9%)であった。

信じられる人で一番多いのは、友人で64.3%を占めている。信じられる人を列挙する形式にしたため、親、母、父と表現が様々となったが、親、母、父と書いた人の計は55.4%である。また、親以外の家族(家族、兄弟姉妹、妹、弟、兄、祖父母、配偶者)を信じられる人としてあげたものは、38.7%である。

*1 広島大学 医学部 保健学科
(連絡先)小柴順子 〒733-0834 広島市西区草津新町1丁目19-2-103

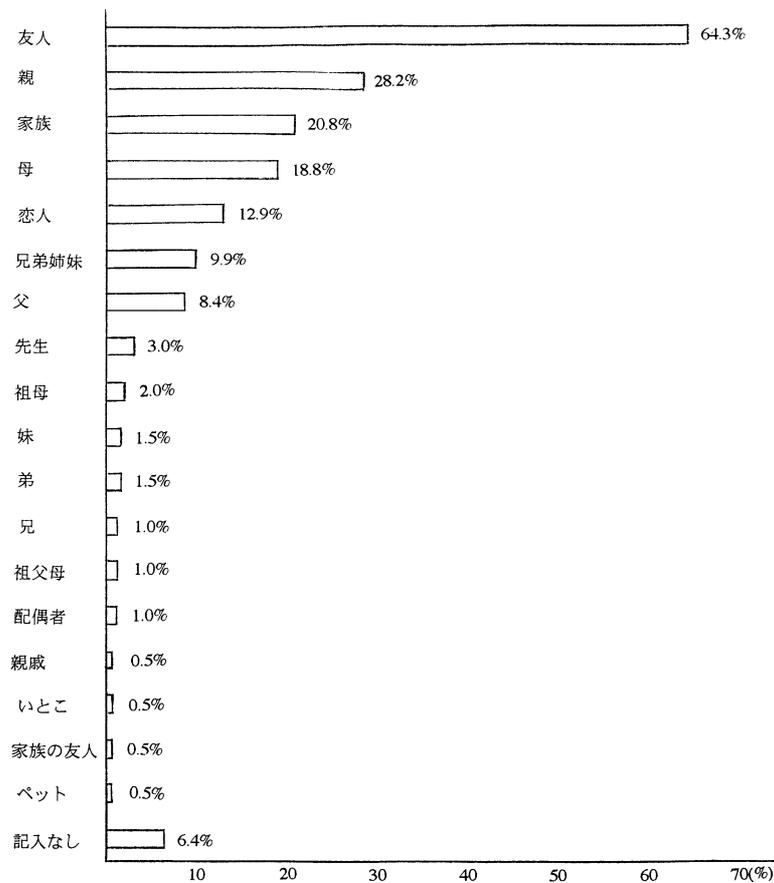


図1 心から信じられる人の内訳 (複数回答)

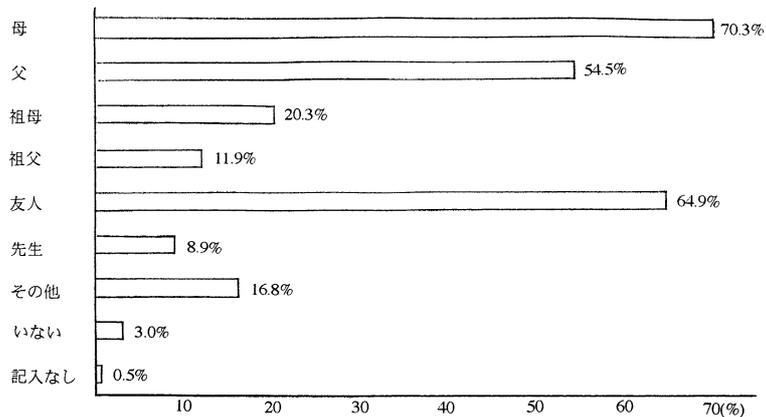


図2 一番信じられる人 (複数回答)

2. ひきこもり」の若者の調査結果

筆者が「親の会」を通して聞いたものをまとめると、表3のとおりである。母親は、押し付けになる位に先走って指示したり、代わりにしてしまうため、本人にとっては迷惑な存在になっている傾向が見られる。1例を除いて、父親は、日頃は仕事中心でほ

とんど話をしないのに、価値観の押し付けをする傾向があり、ひきこもってからは、お互いが避けている状態である。

田辺裕¹⁾のインタビューに応じた15名のコメントの中から当事者のその母親と父親についての印象が書かれているものだけをまとめると表4のように

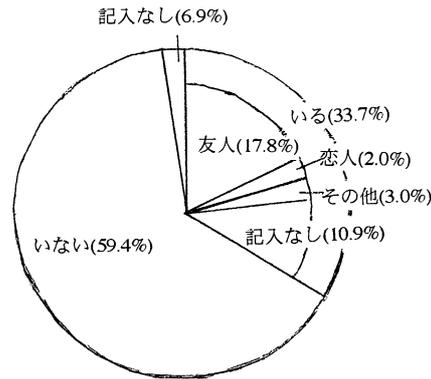


図3 信じたいと思うのに信じられないで苦しんでいる人

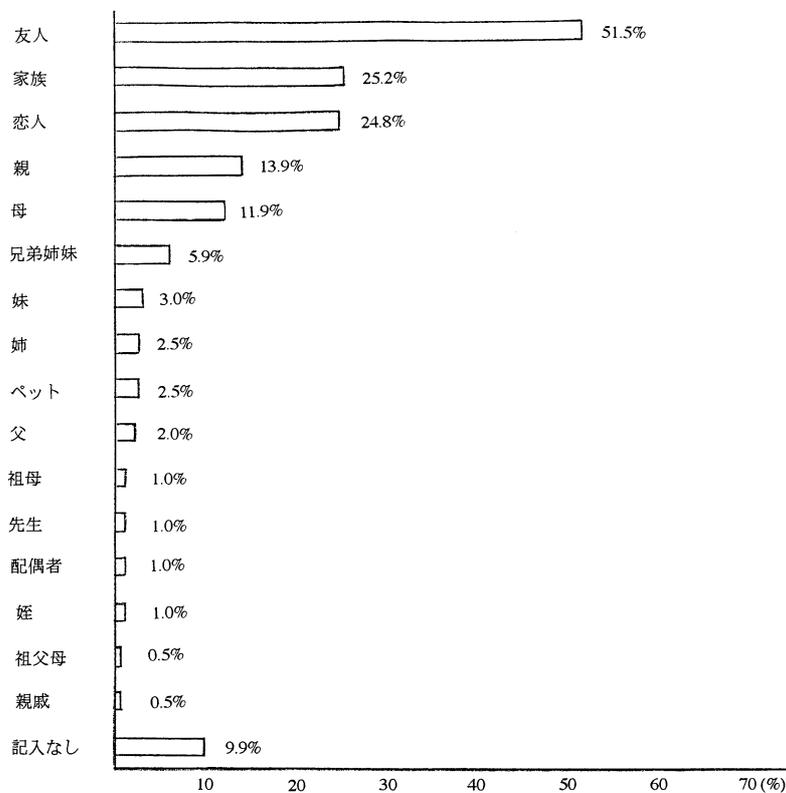


図4 一緒にいるとき、やすらぎやくつろぎを感じる人の内訳(複数回答)

なる。

母親についての印象は、勉強については、厳しく、子どもの将来に対する期待が大きい。また、世間体を気にして、常にまわりの子どもと比較して安心したり、叱咤激励する傾向がある。反面、子どもの気持については、鈍感である。

また、父親の印象については、仕事中心で子どもに無関心であったり、自分の価値観を押し付けたり、わが子とどう付き合っているのか良くわからないの

が、本音のように見える。

塩倉裕²⁾のインタビューに応じた5名の当事者のコメントを同様にまとめたものが表5である。一人だけ、「最も信頼できる人は母親」という言葉を述べているが、他の4名は、父親同様に強制的であったり、価値観の押し付けがあると述べており、父親については、はっきり「一緒にいてくつろげない」という言葉を述べているものがある。

表3 ひきこもり親の会で聞いた親に対する思い

	性別 年齢	会への出席者	母親について	父親について
A	女 23才	本人	口うるさかったが、今は何も言わない	会話なし
B	男 17才	本人	口うるさい	自分の考えを押し付ける
C	男 20才	初回両親、2回目より母親	本人の思いを確認せず、自分の考えで対応する	大人は適当にごまかす
D	女 22才	父親	細かく世話を焼いた (普通分娩で産んで欲しかった)	仕事(教師)の関係でいつも周囲から気遣いされ重荷だった
E	男 30才	母親	必要な話は出来る	きびしい、自分の考えを言えない (高校の時取っ組み合いをして投げ飛ばされてから会話なし)
F	男 23才	母親	父親に言われるまま、先に先に対応した	自分の思い通りにする
G	男 30才	父親		厳しくしつけた 現在ほとんど会話なし

表4 田辺裕¹⁾のインタビューに答えた当事者の母親と父親についての印象

ケース No	性別	インタビュー 一時の年齢	母親について	父親について
No.1	男性	28才	教育ママゴン、全てにおいていい子であれ、きびしく殴ることもあった	子どもは外で遊べ、夜帰りが遅い。
No.4	女性	23才		毎日帰りが遅い 本人に期待をかけている
No.5	女性	34才	甘やかす 腫物に触るよう	子どもに対して全く無関心
No.6	男性	28才	何でも自分でしてしまう	
No.8	男性	24才	学校しゃべらないことを心配してガミガミ	見栄っ張り
No.9	男性	26才	教育ママで活動的。(小5の時躁鬱病になり、中2の時自殺)	無口 話しかけても会話が広がらず、止まってしまう
No.10	女性	27才	「これでいい」と言うことがない。弟と比較され、楽な方に流れると思われている。	全く解りあえていなかった
No.11	女性	24才	見栄っ張り 期待が大きい	横暴なところもあるが、基本的にはいい人
No.12	男性	19才	鈍く、思っていることいじめられていることに気付いてくれない	いつも怒っているみたいなしゃべり方をし、「勉強で勝ったものが世の中を制する」と言い、人の意見を受け付けない
No.13	女性	22才	近所の子と比べられた	
No.15	女性	33才	専業主婦 性格はきつい 「私の言うことを聞いていれば間違いない」が口癖 どの学校を出ているか、どこの会社に勤めているかを重要視	

考 察

「ひきこもり」の若者と通学している大学生の間には、人間関係に大きな違いが見られる。ひきこもりのケースでは、親に対する肯定的な言葉が少ない。それは、基本的信頼といわれる、親子(母子)の信

頼関係が築けておらず、そのために、あらゆる人間関係で必要以上の精神的緊張状態を続けており、家族や両親といっても安心できずにいると考えられる。

多く(70%以上)の大学生は、信頼できる人として、両親をはじめとする家族を挙げており、親子の

表5 塩倉裕²⁾のインタビューに答えた当事者の母親と父親についての印象

ケース No	性別	インタビュー 時の年齢	母親の印象	父親の印象
No1	男性	28才	逃避的。話す機会がない、話す習慣がない、雑談はしても大事な話しはしてなかった	基本的には無関心、小学校の時 には週1回くらい無理に学校 に連れていった
No2	男性	27才	最も信頼できる人 両親は忍耐強かった	もともと子どもに遠慮するよ うなタイプ 転勤が多い
No3	女性	33才	父に怒鳴られることが多く、 「私は不幸」とよく言っていた(不幸と思う)	他人の落ち度に非常に厳しい が、自分の間違いは一度も認め たことのない人。一緒にいて くつろげない。厳しくて過干 渉。私に求めていたのは「さ すが私の娘だ」というあり方
No4	男性	23才	強制的に塾や学校に連れてい かれ、入院もさせられた。(協 力者であり、強制的追い出し)	(小2で離婚) 怖いイメージ、殴られた記憶し かない
No5	女性	39才	親の価値観をすり込まれていた	精神的に強くなれ

信頼関係が築けていると考えられる。また、「信じたいのに信じられない人」として親をあげている者はいない。

現代の若者は、優しく相手を傷つけないという風潮がある。しかし、その背後には実は自分が傷つきたくないという気持ちがある。すでに、1995年には、大平健が「やさしさの精神病理」³⁾でそのことを述べている。

幼児の頃は、万能感をともなう誇大的な自己イメージを抱いて、親にそれを全面的に認めてもらっているという感覚を持てることで、健康な自己愛を形作るのに必要なことである。それが自尊心の発達につながる。おとなとの関係の中で自己愛が傷つけられたり、それを修復したりするうちに健康な自己愛をもてるようになる。全面的に受け入れられる感覚を経験しないとおとなになってから行き過ぎた自己顕示欲を示すともいわれている。万能感を持ち続けることは不可能である。しかし、幼児期に親から無条件で全面的に認めてもらった経験がないと、少しでもつまずくと容易に傷つき、さらに傷つきのを恐れてひきこもると言う心理は、多くのひきこもっている人たちに共通するものがある。

親が子どもに期待することは、子どもが健康に育つためには大切なことである。しかし、現代は、少

子化と経済的な豊さの中で親の期待が少数の子どもに過度に集中してしまう傾向がある。親の期待の中には、親自身が果たせなかった願望や親の価値観が強く反映されることが少なくない。

ひきこもりのケースでは、多くの場合、親子の基本的信頼関係が築けておらず、親に認められるために親の期待に沿うよい子を演じ続けて疲れ果ててしまうことが多いように考えられる。

おわりに

今回の研究では、普通に通学している大学生とひきこもり人の人間関係の違いが明らかになった。一般の大学生は、基本的信頼の上に新たな人間関係を形成し成長しているが、ひきこもりの人は、基本的信頼関係が築けておらず、そのことが人との関わりを難しくし、ひきこもらざるを得なくなっていると推測できる。

この結果を踏まえて、基本的信頼関係が築けていないと考えられるひきこもりの人にどのようにして親子の信頼関係を築いていくか、また信頼関係が築けないとしたら、築かないままにひきこもりから脱出していけるのかをサポートの実践を続けながら研究を深めたいと考えている。

文 献

- 1) 田辺裕：私がひきこもった理由。初版，ブックマン社，東京，8-211，2000.
- 2) 塩倉裕：引きこもり。初版，ビレッジセンター出版局，東京，16-172，2000.
- 3) 大平健：やさしさの精神病理。初版，岩波書店，東京，189-192，1995.

**An Idea for Human Relationships Concerning Young Social Withdrawal
(HIKIKOMORI)
— Compared with Human Relationship between University Students —**

Yoriko KOSHIBA

(Accepted Jun. 2, 2002)

Key words : HIKIKOMORI, YANG PERSON, HUMAN RELATIONSHIP, BASIC TRUST

Correspondence to : Yoriko KOSHIBA

Institute of Health Sciences, Faculty of Medicine

Hiroshima University

Hiroshima, 733-0834, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.1, 2002 139-145)